

かたりしともは ありやあらずや

学部長 濱 口 晴 彦

所沢キャンパスは四季折々に美しい。キャンパスのあちらこちらを点描したら、百景では済まないくらい美しいところや好ましいところをみつけることができる。とくに春がよいという人がいるだろうし、降雪のあとの静寂につつまれたキャンパスのたたずまいがえも言えぬという人もいるだろう。ともかく四季のけじめが所沢キャンパスを隈どっている。

こういう風景の中にいた幾人もの人たちがこれまでにキャンパスをあとにしていった。1987年の創立以来の卒業生や、1995年度に博士課程の完成で博士（人間科学）の学位を得た4人をふくめ4千余の人たちということになる。同様に、その間に幾人もの教員がさまざまな貢績を残して定年などでこのキャンパスを去っていった。今年このリストに新たに柿崎京一先生と渡辺昭先生のお2人のお名前が加わることになった。

人間科学部に沢山の事蹟をとどめられて教授職を辞されることになったお2人に感慨深いものがある。エピソードで一端を紹介してみよう。柿崎先生とある年ある日の昼食を教職員食堂で共にしたときのこと。先生は「大学は農業のようなもので、やろうと思えば大小あれこれいろんなことがある。やることが尽きることがない」とおっしゃったのを、そのときの先生のちょっとした仕草とともに鮮明に記憶している。含蓄のある先生らしい言葉だと思う。大学という右肩上りの組織と、農業という右肩下りといわれている業種を組み合わせ、ともに手間暇かかる人間社会の基礎づくりのかかわりをついでいるところがいい。

ある日のこと、渡辺先生から文書で、学部に動物実験のガイドラインとそのための委員会を早急につくることの要請を受けたことがある。研究・教育の必要から動物実験を行っている学部としてあってよいはずのものがないうままであることを心配されてのことで、私としては虚をつかれ、不明を恥じた。ガイドライン作成の委員会をつくり、作業をいっそう促進することになり、今日では成案をえて、その規則にのっとり動物を使う実験実習をはじめ、学内外での調査研究や実習は行われている。

学部の研究・教育にことほどさように深い識見をおもちのお2人の先生が学則によることではあるにしても、キャンパスを去られることになった。惜別に際し、深く感謝の意をこの場をかりて表したい。

話変って、会津八一没後40年記念の展示が新宿キャンパスの2号館で開催（1996年11月14日より12月11日）されたのを機に、あらためて会津八一の氣息にふれることができた。一字が連らなって歌となり、あるいは古昔の言葉を書家として写すにしても、背後に秘やかな用意のあることを知った。

展示作品の一つの、

たちいてて とやまかはらの しはくさに

かたりしともは ありやあらずや

と、時の動きをとらえた伸びやかな墨跡で書かれた扁額は「母校のかとに立ちて」と題されている。

人間科学部は「かたりしともは ありやあらずや」と歌うには、まだまだ初々しいのだが、去り行く人びととの惜別は、この歌一首の表現力に頼らざるをえない。